「若者広場」設置活動にみる都市下位文化の新たな動向

——「土浦駅西口広場」設置を求める若年層の諸実践から——

The New Tendency of Urban Subcultures in the Activities

to acquire “Open Space” for Youth Group:

A Case Study of the youth subcultural movements at “Tsuchiura Station West Park”

田 中 研 之 輔

TANAKA Kennosuke

This paper explores a new trend in urban subcultures, that of skateboarders seeking public space for their activities. Generally when youth subcultural groups use public spaces, station parks and urban squares, they are under the gaze of local residents or controlled by policemen and security guards. But, the case taken up in this paper progresses to a different situation. In particular, it is about the three-year long movement to acquire “Tsuchiura Station West Park” conducted by ten young skateboarders and a manager of a skateboard shop who conducted a campaign to collect signatures, presented a petition and engaged in various other activities in order to secure space for their activities. They were successful in that they were allowed to use “Tsuchiura Station West Park” for free, on the condition that this permission was granted only until the start of the urban redevelopment of the Tsuchiura station area.

1. 問題の所在

「若者広場」設置を求める署名活動や陳情書を地方自治体に提出する動きが、全国各都市において近年数多くみられるようになった⁽¹⁾。広場設置を求める活動は、主にスケートボードをする若者達によって担われている。「若者広場」設置活動に至るそもそもの経緯は、スケートボードをする若者が駅前や都市公園等の公共の広場にたむろするようになる1990年代前半に遡ること確認できる。

この当時、公共空間の利用をめぐる立場の相違からスケートボードをする若者とのアクターとのあいだでしばしばコンフリクトが生じていた。スケートボードをする若者が夜間にかけて頻繁にたむろするようになると、その近くで生活する地域住民や駅前に隣接する商店街の店舗経営者との間で問題が生じる。スケートボードの行為に伴う騒音、ゴミの放置、店先の縁石や階段の破損等の問題である。これらの問題に対して最初にとられる対応は、「スケートボード禁止」や「スケートボード全面滑走禁止」と記した看板の設置である。公共広場の利用に関する注意書きや警備員らの警告を無視して、スケートボードを続ける若者には警察官が駆けつけて対応する。さらに、スケートボーダーの行為は、道路交通法違反の禁止行為や器物損壊で取り締りを受けることにもなる。近年、スケートボードの文化的行為そのものを制限する目的で監視カメラや特設フェンスが設置されている⁽²⁾。

こうした中でスケートボードをする若者が、スケートボードの専用広場を求める活動を展開するようになる。この動きは、スケートボーダーの下位文化的な実践と地域住民らとの交渉・折衝・縛れの過程で両者の言い分を汲み取る具体的な対応策として生じたものである。それでは、スケートボードをする若者が「若者広場」設置活動をどのように展開

していくのだろうか。

本稿では、2001年5月27日に茨城県土浦市によって開設されるに至った「土浦駅西口広場」の設置経緯とその後の展開を取り上げる。具体的には、地元の土浦市内でスケートボードをする若年集団がスケートボーダー以外のアクターと構築していく社会的ネットワークに着目しながら、下位文化的活動の展開を追跡していく。

続く2節では、都市の下位文化に関する先行研究を検討する。3節では、調査方法ならびに分析対象について述べる。4節では、「土浦駅西口広場」設置を求める諸活動とその後の展開を詳述する。結論を先取るならば、本稿において筆者は次の点を明らかにする。それは、「若者広場」設置活動を通じて、下位文化集団とは異なる層のアクターとの間に社会的ネットワークを構築していく若年層の営みに都市下位文化の新たな動向がみてとれる、ということである。

2. 都市下位文化論の検討

都市と若者の下位文化に関する研究は、シカゴ学派の都市民族誌からアーバニズムの下位文化理論へ至る都市社会学の研究系譜、初期ブリティッシュ・カルチュラルスタディーズのユースサブカルチャーズ研究から近年のサブカルチャーズ論再考の流れ、北米スポーツ社会学のスポーツをテーマとしたサブカルチャーズ研究の蓄積にまとめることができる⁽³⁾。

なかでも、若者の下位文化集団に関する研究は、カルチュラルスタディーズのユースサブカルチャーズ論において蓄積されてきた。ユースサブカルチャーズ論の近年の研究動向を踏まえた上で、成美は「日本の街頭型サブカルチャーをとおして見えてくるのは、都市という公共空間における若者たちのパフォーマンス的な身体表現と、それを逸脱と定義して馴致しようとする社会的監視との象徴的闘争にほかならない」（成美 2001:120）と述べている。本稿で取り上げるスケートボードをする若者達も、都市的公共空間を文化的パフォーマンスの場にして下位文化を創出している。彼らは、ボーダーファッション、髪型、特有の言い回し＝「隠語」、トリック＝技の習得、の総体からなる「スケートボーダー・スタイル」を共有し下位文化集団を形成している。

しかしながら、従来の若年集団の「スタイル」をめぐる象徴的闘争を読み解く下位文化論の枠組みでは、本稿で取り上げる専用広場設置を求めて署名活動を展開するスケートボーダーの営みを捉えることはできない。重要なのは、従来の下位文化論の枠組みの中に対象とする事例を閉じ込めて分析するのではなく担い手としての若者の営みそのものに迫るように下位文化的活動の記述を開いていくことである。本稿の狙いに即して確認すべき二つの研究動向について整理しよう。

一つは、下位文化研究における社会運動論的な視座の導入である。これまでカルチュラルスタディーズのユースサブカルチャーズ論は、若者の下位文化的な実践に資本主義や親文化に対する「抵抗」や「対抗」の可能性を指摘してきた。これら下位文化研究の蓄積は、若者の日常的な実践をある下位文化的な活動に限定して論じてきた傾向がある⁽⁴⁾。けれども、近年、下位文化を他の活動へと接合させていく試みも確認できる。たとえば、野外パーティに実際にコミットする上野（2001）は、下位文化の現場が社会運動への「入り口」となる機会であり実践の場であると指摘する。これは、都市に湧出する下位文化が様々なイシューの社会運動へと接続していく様相を示唆するものであると同時に、「文化」の肯

定的側面を積極的に評価する試みである。

もう一つは、社会運動研究における文化論的な視座の導入である。これには、資源動員論パラダイムのいづまりと、「新しい社会運動論」がもたらした「文化」への着目が関連している⁽⁵⁾。これらは、90年代以降の隣接領域での「文化論的転回」に適応した社会運動論の研究蓄積として捉えることができる。文化論的視座を導入する意義について野宮(2002)は、支配現象や権力現象を積極的に論じること、さらには、抵抗の意味源泉や意味形成のプロセスを捉えることにあるという。それにより、争点や資源に着眼する従来の社会運動論が見落としてきた運動の細部の様相をより現場の運動そのものに着目し抽出する論考が可能となる。文化論的視座を導入した社会運動論の蓄積は、社会運動論それ自体の枠組みを広げるとともに、下位文化研究の運動論的視座の導入と問題関心を共有するものである⁽⁶⁾。

上述した二つの研究動向は、研究の系譜は異なるがどちらも文化と社会運動との関係性について論考するものである。だが、そのどちらのアプローチにおいても、下位文化と社会運動が連関するその局面の記述は、依然として抽象的なレベルにとどまっている。はたして、都市に湧出する下位文化は、社会運動へと連接する場として開かれているのだろうか。また、そうであるのなら、いかなる局面で下位文化と社会運動とが接点を持つのだろうか。下位文化と社会運動との関係性を念頭に置きつつ、本稿では個別具体的な事例の分析を通じて検討を加えていくことにしたい。

3. 調査の方法と対象

本稿では、次の四点のアプローチによって収集した素材を分析対象とする。一点目は、「若者広場」設置活動の全国的な動向を把握する目的で行った新聞記事検索・インターネットキーワード検索である。二点目は、2001年5月27日から2003年12月7日までの2年半にかけて行った「土浦駅西口広場」を利用するスケートボードをする若年集団へのフィールドワークである。三点目は、「土浦駅西口広場」設置に関わるスケートボードショップ店長M、土浦市市議会議員K、土浦市前助役T、土浦市都市整備部開発課広場担当者へのインタビュー調査である。四点目は、土浦市の前助役T氏を中心に2002年に立ち上げられた市民ネットワーク組織「ゆるやかネットワーク土浦」の会合(2002年2月23日、2002年12月14日、2003年6月1日、2003年12月7日)への参加と主要アクターへのインタビュー調査である。

表1では、冒頭でも述べた広場設置活動の近年の全国的な動向が確認できる。表2は、分析対象とするスケートボーダーのパーソナルデータをまとめたものである。本稿で取り上げる「土浦駅西口広場」設置活動を展開した若年集団は、スケートボードを6年から10年と継続しながら地元の高校を卒業し、土浦市内の下請け工場で働く若者やアルバイトをしている若者達によって形成されている。それでは、土浦市在住のスケートボーダーによる「若者広場」設置活動とその後の展開についてみていくことにしよう。

4. 「土浦駅西口広場」設置活動に至る経緯とその後

(1) 地元住民からの苦情と若年層による「専用広場」設置活動

JR常磐線の土浦駅西口に複合型ビル「ウララ」が完成したのは1997年のことである。「ウララ」の北側に設けられたオープン・スペースは、開設当時から土浦駅を利用する会

表1 「スケートボード協会」の設立ならびに広場設置を求める署名活動の全国的な動向

掲載日	市町村	代表 署名活動の展開ならびに、陳情書・嘆願書提出の経緯
1999.12.15.	京都府京都市	男性(29)「スポーツとして楽しむための施設を造ってほしい」と、1200名分の署名と請願書を市に提出
2000.01.14.	奈良県斑鳩町	大学生(19)「スケボー・コート設置を求める会」を設置、署名簿1254名分、要望書を県に提出
2000.03.02.	大阪府枚方市	男性スケートボード専用施設設置に関する請願 採択 2000.03.29.
2000.05.29.	兵庫県姫路市	女性(22)「みんなでスポーツパークを造ろう会」を設立、JR姫路駅前で署名活動続ける
2000.06.08.	神奈川県藤沢市	男性(27)鶴沼海岸スケボー設備存続へ署名活動開始
2000.07.14.	鳥取県出雲市	男性スケートボード協会設立
2000.11.15.	富山県八尾町	男性(36)「エクストリーム・スポーツクラブ」のメンバーらが署名活動続ける
2001.02.14.	東京都八王子市	中学生中・高校生専用スペース要望を市長へ提出
2001.02.23.	福岡県北九州市	スケートパーク設置に関する市長質疑
2001.05.28.	茨城県土浦市	「スケートボード振興会」を設立、地元スケートボードショップを中心に4000名分の署名を集める。その後、土浦市に陳情
2001.09.04.	大阪府福知山市	会社員男性(42)「福知山スケートボード協会」を設立
2001.10.04.	京都府城陽市	高校生3名スケートボード専用施設を求めて陳情書提出
2001.10.12.	福岡県宗像市	市長へ「スケートボード専用広場設置」をとめる手紙をおくる。その後、市議会に1152名分の署名をそえて陳情
2001.12.23.	石川県金沢市	男性(28)「スケボーパークを造ろう会」、堅町商店街などで署名活動。その後署名簿1258名分、金沢市へ提出
2002.03.11.	和歌山県和歌山市	和歌山駅前等で、「公営スケートボード場建設」を求める署名活動を行い、3500名分の署名を集める。
2002.04.14.	山形県新庄市	男性(17)、スケートボードをする高校生20名を中心にクラブを発足。署名活動を行い、市や県へ働きかけていく
2002.10.18.	茨城県日立市	スケートボーダー20数名とBMX10名ほどの若者が県議会議員1に要請。その後、1が日立市長に要望(2002.10.21)
2002.11.29.	福島県いわき市	市内の20代の若者を中心に結成した「スポーツパークプロジェクト」が集めた7108名分の署名と要望書を市に提出
2003.01.05.	北海道札幌市	「札幌にスケートパークを作ろう会」を設立 2002.12.09.より署名活動開始

資料:朝日新聞社戦後新聞記事検索『Digital News Archives』より執筆著作作成(～2003.10.02.)

表2 スケートボーダー 15名のパーソナルデータ⁽⁷⁾

	年齢	初め	高校	希望職	職業・属性(2001)	職業移動(2001年5月～2003年12月) <*A=アルバイト>	親の職業	属性	兄弟
カズシ	23	中1	A	—	製造作業	→(下請け工場)移動なし(正規雇用)	建設作業	長男	姉
ケンジ	23	中1	S	フリーター	大学生	→(茨城県内某)私立大学卒業→硝子下請け会社(正規雇用)	会社員	次男	兄
ユウタ	23	中1	G	—	製造作業	→宅配A→洗車A→製造作業(正規雇用)	会社員	長男	兄弟弟
ツヨシ	24	中3	K	—	フリーター	→塗装工→スキー場A→ガソリンスタンドA→塗装工(短期)	飲食店	長男	姉弟
トモキ	22	中3	S	—	製造作業	→コンビニA→製造作業→ペットボトル再生工場(短期)	会社員	長男	妹
ユウジ	23	中3	G	—	製造作業	→移動なし	会社員	長男	妹
ヒロシ	21	高2	N	高校教師	大学生	→(都内某)私立大学在学中	税金管理	次男	兄
タカシ	22	中2	K	—	建設作業	→移動なし(正規雇用)	建設作業	次男	兄
オサム	21	高1	K	—	製造作業	→移動なし(正規雇用)	水道業	長男	姉
タケヤ	20	高2	H	美容師	高校生	→美容院→ゲームセンターA→(都内某)専門学校在学中	会社員	長男	—
テツヤ	20	高2	N	理容師	高校生	→(茨城県内某)理容師専門学校在学中	会社員	長男	弟
ジュン	20	18	—	特になし	無職	→無職(この間、アルバイト経験なし)	飲食業	長男	—
カズヤ	18	小6	K	絵描き	高校生	→高校在学中:クリーニング屋(正規雇用内定)	飲食業	次男	姉兄
コウイチ	20	高1	I	特になし	高校中退	→コンビニA→客引きA→洋服販売A→コンビニA	飲食業	長男	妹
ダイスケ	19	中1	G	特になし	高校生	→電気メーカー下請け工場(正規雇用)	飲食業	三男	兄兄

社員、地元商店街の買い物客、カップルなどの多くの地元住民に利用されていた。また、土浦を地元とするスケートボーダーにとって「ウララ」は、路面の良さや手頃な高さのモニュメントから絶好の「スポット」であった。

「ウララ」でのスケートボーダーの行為は、次第に、縁石の破損、ゴミのポイ捨て、騒音などの苦情を巻き起こすことになる。なかには、道路交通法違反の禁止行為で警告をうけるものもいた。「ウララ」でのスケートボーダーの行為に対する苦情が多く寄せられていた1997年に、土浦駅西口近くにスケートボード専用ショップがオープンする。当時27

歳のショップの店長M氏が、駅前の「ウララ」でのスケートボーダーに対して寄せられる苦情に対応していくことになる。M氏による対応とは、スケートボードの専用「パーク」の設置をもとめて働きかけていくというきわめて積極的なものであった。

土浦市にパークをつくってやろうって思ったのが4年前。それで、店をオープンすると同時に署名を集め始めたんです。集め始めたら1ヶ月で4千人にもなって、それは（スケートボード専門）雑誌にも載せました。とにかく、あの頃は署名活動をしてパークをつくるというような前例が全国的に見てもなかった。まあ、途中でもうだめかとか、つくったところで意味はあるのかとかいろいろ悩む時期がありました。でも、言ったからにはやらなくちゃっていうのを励みになんとか続けていきました。やっているうちに何人か議員さんにも出会って、いろんな方法で（なんとか市から許可をもらうように）攻めていきました。そのときは、つくば市を意識した上で、土浦で何ができるのかってことを主張しましたね。でもなかなか土浦市のほうは動かなかった。陳情書が効きました。そこからようやく動きがでてきて、最後に会議をしてって感じでしたね。土浦市はその場所を開放しただけです。これまでに4年ですよ。なんだかんだって決まりがあって、ほんと大変でしたね。議員さんたちの大半はなんでスケボー？って感じでしたよ。今でもそうですけどね。何人かの理解ある議員さんたちが動いてくれてよかった。とりあえず、ここまで来て。これからなんですけどね（2001. 5. 31. 木 スケートボードショップ店長M氏）。

M氏は、ショップのオープンと同時に署名を集め始める。ショップに来るスケートボーダーにも、自分たちの専用パークを求める署名活動の展開をすすめていく。その後、M氏と土浦市在住の約10名のスケートボーダーらが中心となって「スケートボード振興会」を立ち上げる。「スケートボード振興会」が中心となった活動は、4千名を越える署名を集めた。そこで、集まった署名に陳情書を添えて、M氏らは土浦市に「スケートボードパーク」設置を嘆願する。この時の土浦市の対応についてM氏は、「（集めた署名も）最初はほんとに紙切れの効果しかない、ほとんどなんですかこれっていう態度」で真剣に取り扱ってくれなかったと振り返る（拙稿 2003）。

広場設置の署名活動をM氏と協力して展開したのが、駅前でスケートボードをしていたカズシ達である。

パークをつくろうってことで署名活動を始めて、まあ3年ぐらいますかね。みんなで署名活動をして、俺もバイト先の人とかに頼んだりとか、ほんといろいろ。とにかく名前を書いてもらって、それをショップに持って行った。最初は、ツヨシとショップの店長が中心になってやっていた。この頃は、パークをつくろうかって思っている奴は10人ぐらいいた。そいつらでツヨシの家で定期的に話をするようになって、月1回は最低でも集まっていた。高3の頃ですね、それで、スケートボード振興会をつくった。俺は実は全然やる気なかった。ツヨシの家で、パークをつくるかどうかを決める多数決をしたら、そこに集まったスケーターのほとんどがなんとなく手を挙げた。それで、俺も渋々賛成した（カズシ 2001. 11. 20. 火）。

「広場設置」活動は、スケートボードをする若者に至極全うなものとして受け入れられたわけではなかった。広場設置活動を中心的に進めていくことになるカズシも、「俺も渋々賛成した」と当時を振り返っている。土浦のスケートボーダーの大半が、当初の話合いにおいて「専用パーク」設置を求める活動に積極的な関心を示してはいなかった。スケートボードショップ店長M氏のはたらきかけに応じたツヨシと他のスケーターとの間には、広場設置を求める活動に対して温度差があったことが確認できる。けれども、専用広場の設置に向けてまったく関心がなかったというわけでもなかった。というのも、彼らは休日や平日の夜間にしばしば滑りに出かけていた秋葉原駅前広場を専用広場の具体的なモデルとして思い浮かべることができたからである。

秋葉原駅前広場は、中央卸売市場神田青果市場跡地の空地利用策として、1993年10月以降東京都千代田区により無料開放されていた。それ以来、広場は、スケートボード、インライン・スケート、インライン・ホッケー、3 on 3 バスケットボールをする若者達に利用されてきた。関東有数の「たまり場」として、広くスケートボーダーにも認知されていた。土浦のスケートボーダーのなかにも秋葉原駅前広場で滑った経験をもつものが何人もいた。カズシやツヨシをはじめ、署名活動を展開していく土浦のスケートボーダーは、秋葉原駅前広場での経験を共有していた。

だが、実際には土浦での専用広場を求める署名活動は、スケートボードをする若者達の思惑通りには展開していかない。土浦のスケートボーダーとM氏らが3年間活動して集めた署名は、土浦市に具体的な対応を迫るものではなかった。スケートボーダーとショップの店長M氏による、いわば、下位文化集団に限定された広場設置活動は、滞っていたのである。それでも、広場設置活動を続けていたところ、彼らは土浦市市議会議員のK氏と出会うことになる。K氏との出会いを通じて広場設置活動は大きく展開していく。

（2）「土浦駅西口広場」設置活動の展開

K氏は、2003年の統一地方選挙で再選を果たした女性市議会議員である。K氏は、これまで女性ならではの視点、主婦の立場に目を向ける重要性を主張しながら、「レッツゴー子育て」、「ファイト土浦パワーアップ行政」、「街を元気に」、「人を元気に」、「チェック行政」をスローガンとする活動を展開してきた。具体的には、中学校校区で連携する福祉ネットワークである「ふれあいネットワーク」をたちあげ、「駅前保育所の設置」、「学校の空き教室の利用」、「市営住宅のバリアフリー」など幅広く活動を行っている。これまでの活動を振り返りK氏は、「行政と市民の声をつなげるとこんなに仕事ができるんですよ、女性議員ならではの視点で、ここまで改善できるんですよ」（2001. 6. 13. 水）と述べている。K氏のはたらきかけの一つに「若者広場」の設置が加わることになる。「若者広場」設置を求めて取り組んでいくことになる経緯について、K氏は次のように振り返る。

議員になるにあたって、市民の声を第一に考えていたから、いろんな層の人に、駅前や商店街、近所の集まりとかで聞き取りをしていたんです。そのとき、駅前でスケートボードをしている若者にも話しかけて、何か土浦市にしてほしいことはある？って聞いたら、スケートボードを存分にできる場所がほしいと話してくれた。彼らは駅前でやっていると、文句を言われたり、警察に追かけられたりと、随分と嫌な思いをしてきたこともわかったし、これからの行政は若者、ばかもの、よそものを取りこんでいかないといけないって考えていたから、なんとか働きかけてみようと思った。でも、最初のころは彼らもわたしに対してなんというのかな、不信感をすごく持っていて、パークをつくるなんてことは信じていなかったみたい。そこは、なんとかしてあげるっていうおばさんの熱意を彼らにみせたら、そのうちの何人かは理解してくれるようになった。それで、パークをつくる場所から彼らとともにと思ったので、スケーターの代表を土浦市の方に3回連れて行った。そこで市長と助役と直接話し合いの場を設けたのよ。このときに運がよかったのは助役の人が、土浦の再生のために役立つのならなんでも取り入れていくという人で、ばんばん憎まれ役をかってくれる人だったということ。私なんかは新人議員だから、なかなか意見を聞いてもらえないってこともあると思うんだけど、この助役のおかげで、話が上手く進んだ。正直、若者広場はちょっと無理かなって、思っていたんだけど、まあ暫定的にはじめてみましょうってことを促した。若者を信頼してほしいし、街の活性化を目指すなら、若者のエネルギーを拘い上げるしかないってことを主張した。とはいっても、スケートボーダーに対するイメージの悪さみたいのがかなりあって、広場なんかつくったら余計何をするかわからないといった反対意見は絶えなかった。それでもスケート

ショップの店長が実際に顔を出してくれたのはよかった。タイミングもよかった。スケーターだけではなく、彼らを応援している社会人が名乗りでてくれたことは大きな力になった（2001. 6. 13. 水）。

K氏は、スケートボーダーの不良イメージを払拭するために、できるかぎり直接的な話し合いの場を設けていく。たとえば、土浦駅前管轄の警察署員に理解を求め、スケートボーダーと共に警察署に出向き話し合いの場を設ける。議会の一般質問では、「若者広場」の設置を呼びかけていく。そこでは、スケートボードをする若者たちが、自由に使用できて、注意も受けないオープン・スペースを強く望んでいること。また、多くの若者に利用されている茨城県協和町にある県西公園の「若者広場」の視察結果を「専用広場」の成功事例として報告した。その上で、K氏は「若者の笑顔がはじけるまち土浦、そんな夢と希望を運んでくれる若者広場の設置を強く要望した」⁽⁸⁾。さらに、広場の管理や利用について、若者たちにコーディネート・プロデュースを任せてみることにについても打診した。

広場設置を求めてはたらきかけていくK氏を後押ししたのが、1998年から2001年までの3年間茨城県から土浦市に出向していたT氏である。都内の私立大学を卒業し、茨城県庁に就職したT氏の配属先は、青少年婦人課であった。その後、T氏は、1987年から高齢化社会対策に取り組み、「地域ケアシステム」の構築を手がける。明野町で助役を務めた1991年から1993年にかけては、環境浄化運動を担っていく。このような様々な経験を積んだT氏は、「まちづくりに欠かせないのが地元の若者である」と主張する⁽⁹⁾。

そのT氏が、土浦駅前の賑わいを求めて、「若者広場」設置活動をバックアップしていくことになる。また、T氏との出会いをきっかけにして、「土浦駅西口広場」設置活動を展開していたスケートボードをする若者は、T氏が中心となって活動する市民ネットワーク組織の会合に参加するようになる。

（３）土浦市役所都市整備部の対応と「土浦駅西口広場」運営協議会での承認

K氏やT氏のはたらきかけもあり、「スケートボード振興会」を立ち上げ活動が続けてきた「若者広場」設置活動は、土浦市による広場の設置に至る。ここでは、広場設置を「承諾」した土浦市側の対応をみておこう。K氏による一般質問に対して土浦市役所都市整備部長は、スケートボードに一部を開放している茨城県内の川口運動公園の事例を取り上げて回答する。「駅周辺の公共施設等につきましては、スケートボードやヒップホップの愛好者の一部において遅い時間帯にわたる騒音、こういうものがあるということで、周辺の住民の皆様からの苦情もあり、開放はされていないというのが現状」（土浦議事録1999）であるが、「若者文化の醸成というような観点から見ますれば、21世紀に向けて若者広場整備も重要であるというふうに認識してございます。今後、市街地における広場整備などにおいて、利用者の意見を聞くなど検討して参りたい、こういうふうに考えております」（土浦議事録1999）と肯定的な立場の回答をしている。

土浦市が「若者広場」として開放することになった場所は、都市基盤整備公団が中止を決めた土浦駅前北地区再開発事業用地の一角であった。土浦市は、土浦市の土地開発公社が鉄建公団から購入した約4600平方メートルの約2600平方メートルのスペースを、駅前再開発事業の着工までの暫定的利用として若者に開放することを選択したのである。この際に、土浦市の「若者広場」設置担当者は、駅前再開発着工までの暫定的な空地利用策として無料開放していた秋葉原駅前広場をモデルにしていた。土浦市の「若者広場」設置担当

者が秋葉原駅前広場を具体的なモデルとして想起できたのは、カズシやケンジらが事前に秋葉原駅前広場の利用状況を担当者伝えていたことによる。

広場設置に至り土浦市は、「土浦駅西口広場」運営協議会を開いている。以下表3は、広場設置運営協議会に参加したアクターや組織をまとめたものである。

土浦市側が運営協議会を開設したのは、地元町内会関係者らに「若者広場」の設置経緯を説明することと、広場設置の承認を得る為であった。運営協議会には、「若者広場」設置活動を展開したカズシとケンジの二人が参加した。運営協議会では広場運営や管理等に関する取り決めが行われた。広場の利用者と町内会の代表ならびに土浦市の関係者が一同に顔を合わせ運営協議会の場を共有したことは、広場設置後の運営・管理の面においても重要な意味をもつことになる。というのも、広場を利用するスケートボーダーにとって、地元住民の「承認」を得た場所であることを少なからず意識させていくことになるからである。この若者広場が設置された「場所」をめぐるっては、様々な土地利用が検討され見送られてきた。

あの場所はタワーにするはずで購入した。けれども、公共事業の見直しということでそのタワー建設ができなくなった。土浦タワー建設の中止がきまると、次は住宅展示場にするってことになった。住宅展示場としての土地利用もコスト面で反対が出た。住宅展示場としての利用が見送られた後に、提出されたのが有料駐車場としての利用。有料駐車場としての利用はすぐに実行に移されたけども、土浦市の民間の駐車場経営者らから反対が出て、現在の面積にまで縮小されて利用されることになった（K氏 2001.7.10.水）。

「若者広場」は、有料駐車場の縮小によって生じた空地の利用策として暫定的に開放されることになったのである。広場設置予定地は、土浦市が駅前再開発事業のために2億5千万円で購入していた場所である。全国的にみられる若者広場設置活動のなかでも、「土浦駅西口広場」設置活動は具体的な成果をもたらした稀有なケースである。それではなぜ、土浦のケースは具体的な成果をもたらすまでに展開したのか。この点についてK氏は、「一般質問の半年後に、駅前北地区再開発事業が駄目になったという时期的なものと、土浦市の助役にTさんがいたことが大きかった。行政のなかに、話のわかる人がいないと駄目。いまの体制では、駅前広場はできなかった（2003.6.7.土）」と振り返る。スケートボーダーとK氏とT氏との間でのネットワークの構築と、駅前再開発が着工しない土浦市の状況とが偶発的に連関したこと。それゆえに「若者広場」設置活動は、開始から4年後

表3 「土浦駅西口広場」運営協議会委員構成員

所属	構成団体／構成員
利用団体	土浦スケートボード振興会代表 BMX 代表 フラワーネット土浦ラベンダークラブ代表
地元	土浦市大和町町内会代表 土浦都市開発(株)
関係団体	(社)土浦青年会議所 土浦市青少年相談員連絡協議会(土浦一中地区)
市関係	都市整備部次長 市民生活部交通安全課長 産業部商工労政課長 産業部中心市街地対策室長 産業部観光物産課長 教育委員会青少年センター長
施設管理者	土地開発公社事務局長 土地開発公社主査
事務局	都市整備部開発課長 都市整備部開発副参事兼調査係長 都市整備部開発調査係担当係長 都市整備部開発調査係主事補

(開発公社「土浦駅西口広場」関連資料と広場運営・管理担当者への聞き取りより執筆者作成)

の2001年5月27日に土浦市によって無料開放される若者向けの広場を獲得するに至ったのである。

広場開設後、広場を利用するスケートボーダーの大半は、利用時間や利用規則を守っている⁽¹⁰⁾。広場が土浦市によって設置されてから26ヶ月が経過した。この間、スケートボーダーやBMXライダーの若者たちによる日頃の利用については、大きな問題は生じていない。その一方で、広場を利用したイベントでは、新たな問題が生じている⁽¹¹⁾。

ここで改めて確認すべきことは、この広場は土浦駅北地区駅前再開発着工までの暫定的開放であるということである。土浦駅西口広場の行方を象徴するのが、秋葉原駅前広場である。土浦駅西口広場設置のモデルとなった秋葉原駅前広場は、「土浦駅西口広場」開設の2ヵ月後、東京都による秋葉原駅付近土地地区画事業工事の着工により閉鎖されることになった。

(4)「土浦駅西口広場」設置活動と「ゆるやかネットワーク土浦」とのつながり

スケートボード振興会は、「若者広場」設置活動を通じてネットワークを構築したK氏とT氏とが活動する土浦の市民ネットワーク組織の「ゆるやかネットワーク土浦」とかかわりをもつことになる。

「土浦再生」を掲げたまちづくり活動として立ち上がったこの市民ネットワーク組織の中心的なアクターが、「若者広場」設置活動をサポートしたT氏である。T氏と常陽新聞社前社長I氏ならびに現土浦ケーブルテレビ代表取締役社長A氏は、高校の同窓生である。K氏が土浦市市議会議員の一期目を勤めていた際に、土浦市の助役であったT氏とのネットワークが構築された。K氏の女性ネットワークにより、「ゆるやかネットワーク土浦」は、介護や福祉分野の地域住民組織とも関係を築いていく。土浦市生きがい対応型サービス施設代表M氏とのネットワークもこのときに構築されたものである。さらに、「ゆるやかネットワーク土浦」は、土浦市市民協会、土浦商工会議所の中心的なアクターであるH氏のネットワークにより、市民ネットワーク組織として十分な基盤を確立しつつある。

図1は、「ゆるやかネットワーク土浦」の組織連関をまとめたものである。「ゆるやかネットワーク土浦」は、T氏を中心に2002年2月23日に発足する。土浦市の公民館で行われた第一回の会合には、土浦市の市民活動団体の代表者や地元のローカル・メディア、学識経験者ら89名が出席した。会合のテーマには、「わたしたちの土浦で、市民が誇りと自信と安心を感じながら生活していくには、市民は何をしたら良いか」が掲げられ、活発な話し合いが行われた。

この会合に、カズシとタクヤとダイスケの3人が「スケートボード振興会」の代表として出席する。その中で、カズシは自分達の「若者広場」設置活動をふまえて、駅前周辺に若者を集めるにはどのようにすべきなのか、また、柏市や水戸市と比べながら土浦の駅前の状況について意見を述べた。ここでのカズシの発言の模様は、その後、土浦市のケーブルテレビで繰り返し放送されることになる⁽¹³⁾。

まとめよう。土浦駅前の「ウララ」でのスケートボーダーの行為は、地元住民と様々な問題を引き起こしていた。だが、「若者広場」設置活動で構築した社会的ネットワークを通して、「ゆるやかネットワーク土浦」の会合の場で、他のアクターと意見を交わすまでに彼らの下位文化的活動は展開してきた。言い換えるなら、利害を対立させていたアク

図1 「ゆるやかネットワーク土浦」組織連関図⁽¹²⁾

ター間の立場の相違を越えた社会的ネットワークが「若者広場」設置活動を通じて構築されてきたのである。

5. 結論にかえて

本稿で取り上げた「若者広場」設置活動は、駅前再開発着工に至るまでという条件付きではあるが地方自治体による専用広場の無料開放という具体的な成果を挙げた。特出すべきなのは、スケートボードをする若者たちが、公共空間での文化的活動の制限に対応し、専用広場の設置を求めて署名活動を展開し、その活動を通じて下位文化的な集団をこえた社会的ネットワークを構築したことである。ここで構築した社会的ネットワークをもとにスケートボードをする若年集団は、地元の市民ネットワーク組織の活動にも関わるようになる。

「若者広場」設置活動を求める若年層の一連のはたらきかけは、支配的な権力とのせめぎあいの中で生じるコンフリクトに対して、状況に適応しながら柔軟に対応していく下位文化集団の営みであるといえよう。このような若年層のはたらきかけに、従来語られてきた支配的な権力に対する「対抗」や「抵抗」の担い手層の若者像とは異なる下位文化的活動がみてとれる。また、下位文化の担い手集団が他のアクターと構築していく社会的ネットワークに着目し、その社会的ネットワークがどのような活動に展開していくのかを丹念に追跡していくことで、下位文化と社会運動との関係性がより現場レベルの具体的なかわりから明らかになってくるであろう。

都市の下位文化研究は、若年層の奇抜な髪型やファッションや身振りの象徴的意味を読み解くスタイルの社会学的分析と、担い手の柔軟な実践を都市社会との関係性の中で捉え

ていく作業とを相互に関連させていく記述へと深化していかなければならない。

註

- (1)「若者広場」設置活動は、地域的な偏りがあるというよりは全国各都市においてみられる。本稿では、新聞記事として取り上げられたものを基礎資料とし表1にまとめているが、それ以外にも筆者はスケートボード関連の専門誌や聞き取りにおいて広場設置活動の事例を幾つも確認している。
- (2)現代都市にみられる空間的なセグリゲーションの様相について拙稿(2004)では、都内の事例を用い論考している。
- (3)都市と若者の下位文化に関する蓄積の整理は、拙稿(2003)を参照。
- (4)本稿では、下位文化と社会運動との接点に関する論考に焦点を絞り整理したため、わが国で豊富に蓄積されてきた青年意識に力点を置いた「若者文化論」は特に取り上げていない。
- (5)社会運動論が「文化」研究を取り入れていく経緯の研究史的な整理は、野宮(2002)に詳しい。
- (6)下位文化論と社会運動論の交差に取り組む近年の動きは、社会学的な蓄積を振り返れば、それがとりわけ新たな視座ではないことに気づく。たとえば、それは高田(1978)の蓄積にみることができる。高田の「対抗文化」と近年の「下位文化」とは分析枠組みは異なるのだが、研究者の問題関心としては近似している。高田は「対抗文化の世界を根底から把握するには、対抗文化自体を内在的に捉えなければならぬ」(高田1978:38)とし、対抗文化運動の生成過程への着目をすでに提起している。高田がカルチュラルスタディーズ派の下位文化研究の導入ならびに蓄積をどのように捉えているかは興味深い。
- (7)表1の職業分類、親の職業に関しては、基本的にインフォーマント15名による分類に基づいている。項目内の属性は、2002年12月の時点でのデータである。「初め」とは、スケートボードを始めた時の学年を指している。「高校」は、本稿で対象とする15名の通った土浦市内の高校を仮表記したものである。「職業移動」とは、2001年5月27日から2003年12月1日までを対象としている。
- (8)K氏の市議会で発言は、土浦市議会1999『平成11年第4回土浦市議会定例会会議録』を参照している。以降、本文で一般質問のやりとりを引用する際には(土浦議事録1999)と表記する。
- (9)T氏の行政の立場からのほたらきかけに関する記述は、T氏の語りとT氏が記した茨城県生活福祉部1979「地域福祉の担い手としての青少年」『地域福祉の今後のあり方』.ならびに茨城県地域福祉研究会1980『「福祉コミュニティ」の形成による地域福祉の増進』『茨城公論』.に基づいている。
- (10)広場の運営・管理にかかる主な経費は、警備員の外注料としての年間約百万円、ナイター照明料の年間約二百万円である。そのほか、広場に備え付けのバスケットボールコートゴールや広場のフェンス等は、土浦市が業者を雇い修繕している。土浦市は、広場の修繕費を隣接する敷地約2000平方メートルの有料駐車場の収益で賄っている。ちなみに、駐車場の年間利用台数は、約13万6千台で、年間利益は3千7百万円におよぶ。この利益をJRと土浦市で二分している(土浦市役所都市整備部開発課の広場担当者2002.08.06.水)。
- (11)新たな問題とは、音響設備を広場に持ち込んで行うイベントに対して寄せられる住民からの騒音の苦情である。イベントは、ストリートダンスをする若者やスケートボーダーらによる「手作り」のものである。広場で行われる各種イベントの主催者は、土浦市に広場使用料を納めることになっている。広場使用料は、原則的に無料である。だが、営利活動を目的に使用する場合には、有料となる。営利目的での広場の全面使用は、一日5万円、半面使用は、2万5千円である。新たな問題の詳細については、稿を改める。
- (12)図1の組織連関図は、2003年の11月現在において執筆者が作成したものである。図の()内の数字はアクターの年齢を示している。
- (13)VTRは、会合の様子を短くコンパクトにまとめたものであった。そのなかで、カズシの発言場面は「カット」されることなく放送された。旧友らとの「飲み会」においてカズシの発言は話題になる。カズシはこの出来事を通じて土浦の「政治」を意識していくようになる。カズシは今後、土浦の「政治」といかにしてかかわっていくのだろうか。それを踏まえてはじめて、ホワイト(1993=2000)の著作と向き合うことができる。尚、スケートボード振興会と市民ネットワーク組織とのかかわりが、どの

ように展開していくかについては今後の継続調査によって明らかとなる。

参考文献

- 成美弘至 2001 「サブカルチャー」 吉見俊哉（編）『カルチュラル・スタディーズ』講談社選書メチエ pp. 93-122.
- 野宮大志郎（編） 2002 『社会運動と文化』 ミネルヴァ書房.
- 高田昭彦 1978 『『対抗文化論序説』—対抗文化の世界と社会学の接点—』『成蹊大学文学部紀要』 pp. 38-76.
- 田中研之輔 2003 「都市空間と若者の『族』 文化—スケートボーダーの日常的実践から—」『スポーツ社会学研究』 pp. 46-61.
- 2004 「都市空間の管理と路地裏の身体文化—スケートボーダーの「たまり場」をめぐる—」『日本都市社会学会年報 22』 pp. 139-155.
- 上野俊哉・毛利嘉孝（編） 2002 『実践カルチュラル・スタディーズ』ちくま新書.
- Whyte, F. W. 1993 *Street Corner Society*, Fourth Edition, Chicago Press. 奥田道大・有里典三（訳）『ストリート・コーナー・ソサエティ』有斐閣 2000.

（日本学術振興会特別研究員 一橋大学大学院社会学研究科博士課程）